問題解決における地域学習の授業の開発
―「結城つむぎ」の授業づくりを通して―

玉川大学　　元常磐大学
森山賢一　　伊東健

Development of teaching of regional learning in problem solving–Through the leson planing, "Yuki tumugi"

キーワード：学習過程、問題解決学習、授業実践、地域社会
Keyword　：Learning process, Problem–solving leaning, Teaching practice, Community

1．はじめに

社会科の問題解決学習にあたっては、児童生徒が社会に強い関心を持ち、知的な探究を行い、視野の広い客観的・合理的な社会認識を獲得することが重要である。ともすれば、教師の過度な指示や助言は子どもを受け身にさせ、指示待ち、積極的な取り組みを阻害させる要因ともなる。実際にそこでは、社会に対する興味・関心や直接体験の有無、基礎学力の程度などを十分に把握して指導にあたることが必要である。

小学校社会科においては、地域学習は重要な内容となっている。ここで言う地域とは、身近な地域（校区）、市（区・町・村）、県（都道府）を主として指すが、この地域学習は地域における地理的環境、したがって社会的事象や自然的事象を取り上げ、直接観察したり、地図や図書資料などを活用して調査し、まとめて表現することが目的とされている。

さらに社会科学習においての産業学習にあっては、大きく変化する時代の中で、産業分野の変化はとりわけ著しく、地域学習にかかわって重要な要素を包含しているともいえる。

本稿においては、茨城県結城市の小学校で実践された特色ある地域学習における「結城つむぎ」の授業の学習過程をもとに問題解決学習の方向性と実践的課題について考察を行うものとする。

2．地域学習の授業実践

ここでは、小学校３年生で実際に行った地域学習の授業実践例を示す。

例示する内容は、自分たちの市を範囲とする地域の人々の生活の様子を、具体的な観察や資料を活用して、自然環境との関係、生産活動と消費生活、歴史的な変化の３つの視点からとらえることをねらいとして実施されたものである。ここで取り上げた授業実践は、茨城県結城市の小学校での体験的な活動を取り入れた郷土の伝統工芸品である結城つむぎの授業過程である。

実際の指導にあたっては、自分たちの市の重要な生産品である結城つむぎの特色や作り方に興味を持ち、生産は地域の自然的条件や社会的条件と深いかかわりがあること、生産活動を通して他地域との結びつきがあること等を意欲的に調べたり、体験的学習を行うことができるようにすることが示される。

それでは、学習過程をしっかりとたどってみたい。第1の学習段階では、五感に訴える導入の段階である。結城つむぎという言葉だけはある程度の児童が知っているが、機織りの様子や反物を実際に見ることはほとんどない状況である。そのため、繭玉やつむぎの布の実物に興味をもって手にし、その感触を「白くて軽いね」とか「ごわごわしている」といった言葉で表現している。

第2の学習段階では、結城つむぎの製作工程を副読本や写真等の資料から調べる学習という「調べ学習」であり、ひとり調べからグループへと展開される。

小学校の社会科では子どもたちに調べて考えさせたり、調べて理解させる学習を重視しているが、ここでは、自分自身で調べ考え、自分なりに発見したものが自分のものとなる。ここに調べ学習の重要な意味がある。ひとり調べの学習時間が不足すると、その後の学習が充実したものとならないことに留意することが必要である。

第3の学習段階では、繭玉からつくしを使って糸を紡ぐ体験的な学習である。子どもたちにとってはじめての体験であり、うまく糸を紡げることができなかったり、すぐに切れてしまい、思ったよりも難しいことが十分に理解できたと思われる。

ここでのねらいは、仕事の工夫や手間がかかることに気付かせることであったが、この地域にはごく少数ではあるが、毎日糸を紡いでいる地域住民もいるので、ゲストティーチャーとしてお願いしたり、ティームティーチング方式を導入したりすることも今後の工夫点としてあげられる。

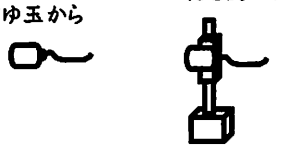
またこの後の工程については、映像を用いることなども学習を充実させるための工夫点としてもあげられよう。

地域社会の方々の協力を得ることは地域とのかかわりを重視した学習において重要な視点としてとらえられる。その場合、ここでの授業の意図や進め方を中心に、事前の打ち合わせを十分にしておくことが必要である。

第4の学習段階では、まとめとして、本時の学習について、自分の考えや感想をノートに記入させている。このことによって子どもたち、ひとりひとりの学習の習得状況を教師が的確に把握するのに適切であったと言える。

この授業は全体として、体験的な活動を十分に取り入れ、多くの資料等も積極的に活用され、調べ学習の充実もみられ、その学習過程の中で明確に地域の特色が生かされた授業であった。

なお、本時は、あくまでも自分たちの市の重要な生産活動の導入としての学習内容として位置づけられており、次時からの地域の自然的条件や社会的条件とのかかわりや、他の地域との結び付きの上に成り立っていることに関して具体的事実に即して子どもたちに追求させることが必要である。

段階	学習活動・内容	体験を通して考えを深めるための　支援と評価
一斉 ↓ グループ とらえる (10)	1 めあてを確かめ、紬や繭玉を提示し、調べる手掛かりを話し合う。 ○ 原料や製品について話し合う。 結城紬とは、どんなものだろう。 (1) 繭玉や紬布を触ったり、観察したりして感想を話し合う。 ○ 繭玉…白くふわふわ。柔らかい。 ○ 布地…少し硬い。紺色。模様。	○ 結城紬の原料や製品は、どのようなものか確かめ、学習の進め方を明らかにする。 ○ 紬についての予備知識は、多少あるが　実体験はほとんどないので、繭玉や紬に触って、原料と製品がどのようなものか体感する。
個 ↓ グループ 調べる (10)	2 どのように作られていくのか調べる。 ○ 副読本や写真から調べる。 ○ パンフレットや自分で集めた資料から調べる。 繭玉から糸をとる。→糸をつくる (染色・かすりしばり) →布を織る。 ○ 調べたことをもとに話し合う。	○ 今までの生活経験からも考えてみるようにする。「…で見た。」「○○が織っていた。」「○○が着ていた。」そこから分かったことを導き出す。 ○ 資料を読み取る力の弱い児童には、見方を助言したり、一緒に読むようにする。
グループ ↓ 一斉 たしかめる　たしかめる (15)	3 糸を紡いでみる。(グループごと) まゆ玉から　つくしを使って  4 やってみた感想を話し合う。 ○ すぐ切れてしまう。 ○ まっすぐにきれいに取れない。 ○ このままでは　やりにくい。 5 これから調べることを話し合う。 ○ このあとどのように作られるのだろう。 ○ どこで作っているのだろう。 ○ 作るのに何日ぐらいかかるのだろう。 ○ 結城市で紬織りがさかんなのは、どうしてだろう。	○ 糸の取り方をそれぞれ考え、作業の大変さを味わう。 ○ つくしに気付いた児童は使ってみる。 ○ 自分のやった方法よりもっとよい方法があるのではないかという意識を持つようにしたい。 ○ 繭から直接取るのではなく、まわたがけをして、柔らかくしてから紡ぐことに気付くようにしたい。(仕事の工夫・手間が掛かること) ○ つくしを提示して、何に使うものか予想する。 ○ 一つの工場で全部作るものではないので、どのように調べていくかおさえておきたい。
個 ↓ 一斉 ひろげる (10)	6 本時のまとめをし、自己評価する。 「今日の学習で…」自分の考えや感想をまとめる。 ○ 紬の糸を取ることは難しい。作る人たちはどんな工夫をしてやっているのだろう。 7 次時の課題について話し合う。 紬はどのように作られ、どんな工夫があるのだろう	○ 調べたことと体験からできるだけ総合的に考えるようにしたい。 ○ できるだけ紬をつくる人の立場になって考えていくようにしたい。 ○ (評) 結城紬について関心を持って、意欲的に調べたり、特徴を考えたりできたか。(発言や活動の様子、ノートにまとめたものを補助簿に記入し、学習の進め方に従って個別にできるようにする。 ○ 課題をおさえ、近くで「紬」の仕事をしている場所をできるだけ見学、聞き取りできるように助言する。

3．よりよい地域学習を実践するための課題―おわりに―

地域学習は子どもの主体的な活動を通じて行われるものであるが、その学習過程での教師の支援が重要な要素となる。

地域学習を充実するためには資料の活用が積極的に進められることが必要である。特に調べ学習にかかわってはまさに教師の指導性が問われるところである。ここでは子ども自身が本当の意味において、調べたい、確認してみたい、といったその動機づけ、探究心を持続、発展させることが鍵となる。

調べ学習を通して子ども―教師間また、子ども―子ども間の多くの相互作用に基づいて、認識が深まるという学習過程を実現しなければならないのである。これらの地域学習における調べ学習の意義をわれわれは再度認識することが必要であろう。

＜引用・参考文献＞

・梅根悟『教育方法』誠文堂新光社　1964 年
・秋田喜代美・藤江康彦『授業研究と学習過程』日本放送出版協会　2010 年
・磯田一雄『授業の原理を求めて』教育出版　1980 年

投　稿　要　領

「教育実践学研究」投稿要領

「教育実践学研究」編集委員会

会員の研究成果発表の機会を保障するという趣旨で、教育実践学会紀要「教育実践学研究」を刊行します。投稿要領は下記の通りです。

記

1．論文の性格

論文原稿は、未発表のものに限ります。（但し、口頭発表、プリントの場合はこの限りではない。）

2．論文の種類

本誌は、教育理論・実践に関する研究誌であり、原著論文をはじめ、下記の論文などを掲載します。

（1）原著論文

教育理論・実践に関係ある独創的な研究成果の報告、あるいは会員の参考となるような有効な新しいデータをまとめたもの。

（2）資料

実践報告、試験的な研究の報告、特定分野の現状などを広い角度から記録、文献等を引用して記述したもの。

（3）研究ノート

研究速報、新しい発想、提言、問題提起、事例報告など研究上、記録にとどめておく価値があると認められるものや、既発表の論文に対するコメントで、研究上記録にとどめておく価値があると認められるもの。

（4）総合報告

特定の主題に関する一連の研究およびその周辺領域の発展を著者の見解に従って総括的、かつ体系的に報告したもの。

（5）展望

特定分野の進歩や将来の見通しなどを、広い視野から記述したもの、例えば他学会の展望など。

（6）研究詳解

特定の主題について、理論的・実践的研究成果を、最近の結果や知見を加えてにもわかりやすく説明したもの。

（7）その他

いずれも原則として未発表のものに限ります。

3．論文に投稿できる対象

投稿者は本学会会員に限ります。（共同研究の場合も同じ。）ただし、依頼原稿の場合はその限りではない。

4．投稿期日

原稿は随時受け付けます。但し、発行期日との関係で、年１回の締切日を設けます。

原稿締切日　　12月30日
発行　　翌年　3月

5．枚数

原著論文については、横書きＡ４版用紙、20,000字以内（図表を含め原稿用紙50枚以内）でワープロにより作成すること。
その他の論文（資料、研究ノート、総合報告、展望、研究詳解）については、横書き、A4版用紙10,000字以内（図表を含め原稿用紙25枚以内）でワープロで作成する。

6．原稿の作り方と投稿手続き

原稿執筆の場合、形式は「教育実践学研究」執筆要項によります。
原稿は３部(コピー可)提出してください。なお､原稿の控えを必ず著者の手元に残してください。
原稿は原則として返却しません。

7．投稿原稿の扱い

投稿された原稿は、編集委員会が選定･依頼した査読者の審査を経て、掲載の可否を決定します。

8．原稿送付先

投稿の際、別紙に標題、種別、著者名（フリガナ)、所属（職名その他を含む)、
連絡先（郵便番号､電話番号）を明記したものを添付してください。送付先は紀要編集委員会宛。

9．校正

採録が決定した原稿の校正は、原則として編集委員会が行う。

10．費用の負担

図表や写真などの印刷について、特に費用を要するものは、執筆者の負担とすることがある。

「教育実践学研究」執筆要項

1．原稿の冒頭には、表題、著者名、所属機関および所在地、抄録（400字以内）、および、キーワード（5～6語）を日英両語で入れる。なお、抄録の英文は省略することも可能とする。提出後は訂正、加除を要しないようにする。

2．固有名詞以外の外国語は、できる限り訳語を用い、必要な場合は、初出の際のみ原綴を付する。

3．図表は、大きさにもよるが、1つの図表につき約500字換算する（編集委員会で検討）
表1、図1のように一連番号を付するとともに、必ず題を付ける。また、図表などは、原稿に組み入れる形式で作成する。

4．参考文献は、文章中右上1/4に1）など、番号を付し、註として論文の最後に記述するか、あるいは論文の最後に著者名をアルファベット順に一括して表現する。どちらの方法をとってもよい。
（例1）高久1）は、
・・・・・・といっている1)。
（例2）高久（2000）は、
・・・・・といっている（高久)。

5．参考文献の記述形式は、雑誌の場合、著者名、発表年、表題、雑誌名、巻数、論文所在ページの順とし、場合、場合、場合、単行本の著者、発行年、書名、発行所、の順とする。
（例）高久清吉（2000）『哲学のある教育実践―『総合的な学習は大丈夫か』－』教育出版
高久清吉（1999）「『自ら学び自ら考える力』を育てる方法原理―『総合的な学習の時間』の実践課題―」、茨城教育実践学会『教育実践学研究』第3号、pp.1-12

また、参考文献は、各自発行年順、50音順等統一した順番であげること。

6．当用漢字、現代かなづかいにより、数字は算用数字を使用する。

7．本誌全体のレイアウトの関係で、本部中の字下げは行わないこと。

8．原稿はワープロで作成する場合、余白を上下左右20㎜とし、1ページを40字40行で作成する。

9．掲載決定後の編集作業のため、原稿は必ずフローピーを添えて提出すること。

10．図表を多用する必要があり、執筆者側が設定する書式でフロッピーを活用する必要がある場合は、1ページの書式について編集委員会までお問い合わせ下さい。

○　編集後記

『教育実践学研究』第 17 号をお届けいたします。

本号は編集委員会の審査の結果、原著論文 3 編、研究ノート 1 編を掲載することとなりました。多くのご投稿をいただき有難うございました。

査読のご担当をいただきました会員の皆様には心よりお礼申し上げます。諸般の事情により発刊が大変に遅れましたことを深くお詫び申し上げます。

なお、今後とも多くの会員の皆様よりご投稿をお待ち申し上げます。

（文責　工藤　亘）

○　紀要編集委員会

◎工藤　亘　（玉川大学）

森山　賢一（玉川大学）

相場　博明（慶應義塾幼稚舎）

田子　健　（東京薬科大学）

（◎　編集委員長）

教育実践学研究第 17 号

2013 年 3 月 31 日

発　行：　教育実践学会（会長　森山　賢一）

事務局：　〒 194-8610

東京都町田市玉川学園 6-1-1

玉川大学教育学部内

工藤亘研究室

TEL：042-739-8026

印　刷：　学校法人 玉川学園 Document Tech-Station

東京都町田市玉川学園 6-1-1

TEL：042-739-8136

FAX：042-739-8136